

令和7年度 第2回 織田廣喜美術館運営協議会 会議録

1. 会 議 の 名 称 令和7年度 第2回 織田廣喜美術館運営協議会

2. 開 催 日 時 令和7年11月13日(木)10:30～

3. 開 催 場 所 織田廣喜美術館 市民アトリエ

4. 公開非公開の別 公開

5. 出 席 者 ※敬称略

(1)出席委員

会 長 緒方 泉

副会長 丸山 桃子

委 員 三木 一司

委 員 石場 広規

委 員 坂本瑠里子

委 員 川尻 司

(2)欠席委員

なし

(3)教育委員会

教育長 伊東 新治

課 長 末永 康洋

課長補佐(館長) 松浦 宇哲

文化推進係主査 有江 俊哉

(4)指定管理者 (株)図書館流通センター

統括責任者 下田 富美子

サブチーフ 木村 亜沙子

6. 傍 聴 人 数 0人

7. 議題及び審議の内容

【議題】

(1)令和7年度事業経過報告

(2)令和8年度事業計画について

(3)今後の織田廣喜美術館の運営について

【提出資料】

- (1) 令和7年度事業計画及び経過報告(4-9月)-----資料1
- (2) 利用者統計-----資料2
- (3) アクションプラン・目標・課題等取組状況シート-----資料3
- (4) 令和8年度事業計画-----資料4
- (5) 嘉麻市立織田廣喜美術館運営方針案-----資料5

議題及び審議の内容

議題1:令和7年度事業経過報告

指定管理者による説明(資料1)

事務局による説明(資料2、3)

質疑応答

●委員:NHKの取材が入ったとのことで、これまでイベント時にはNHKニュースやローカルニュースで美術館が取り上げられているのをよく見ていた。こうした機会が増えることは非常に良いことであり、ニュースの素材として扱ってもらえるとさらに効果が大きい。県展のときにも取材があり報道されれば良いと感じていた。皆さんの尽力により、資料3に示されていたメディア掲載の回数が増加していることは非常に良かったと感じている。入館者数については時期や社会状況によって変動が大きく難しい面もあるが、多く来館していただけたことはとても良いことである。また、市内と市外の来館者の比率についても、7月・8月は市外が多いのは当然として、それ以外の期間では市内の来館者が増えており、経年的にも増加傾向にあることが分かった点が良かった。

●会長:メディアに取り上げられることは非常に重要であり、多くの人に美術館を知ってもらう機会となる。ただし、マスコミは「ネタ」で動く。こちらがどのようなネタを提示するかによって、取材が動く場合と動かない場合がある。記者が書きたくなる材料、記事にしやすいネタを、リリースの段階でどのように伝えるかが極めて重要である。記事にできる具体的材料があれば記者は来るが、抽象的な内容では動きにくい。美術館が持つ素材をどう発信するか、もっと研究する余地がある。

●委員:柴田ケイコ展の期間中、市内の学校がどれだけ利用したか数えてみた。碓井義務教育学校では特別支援学級の児童が特別展示を利用していた。小学校では上山田小学校、稲築志耕館高校、山田中学校でも職場体験として利用していた。私は現在碓井義務教育学校に勤務しているが、地域にある文化施設を教育活動にもっと活用していきたい。コミュニティスクールの話もあったが、この地域に美術館があることは碓井地区の強みであ

る。市内の学校が来館するにはバスが必要であり、例えば嘉穂小学校のスクールバスは管理職が早めに押さえれば利用できる。こうした取り組みを早い段階で進めたい。他地域とは言わないが、まずは嘉麻市内の子どもたちに美術館で美術を体験してほしいと思う。

●**会長**：学校と美術館をつなぐ方法として、近い学校であれば歩いて来ることも可能だが、遠方の学校は安全管理の面からバス移動が必要であろう。移動手段があるにもかかわらず、学校側がそれを知らずに使っていない可能性もある。使える枠があるのに認知されていないケースもある。そのため、美術館や教育委員会が学校へ積極的に情報提供していくことは、市の資源を共有するという意識の醸成にもつながる。また、委員の述べた通り、ミュージアムの鑑賞活動は子どもたちの感情調整にも重要である。学校へ行きづら子どもたちの背景には「自分の気持ちを言葉にできない」という問題があり、それが対人関係の困難や登校のハードルにつながる。ミュージアムには作家の感情表現が可視化されており、その表現を通じて子どもが自分の言葉を発するきっかけにもなる。そこで「自己調整力」が働く。イギリスでは「クリエイティブ・ヘルス」という考え方が進められており、ロンドン市が取り組んでいる。子どもたちの心を少し楽にするために、アートを用いるという施策である。まず、美術館に来るための条件づくりをどう整えるかが重要である。

●**委員**：柴田ケイコ展の関連企画で「おいしいもの紹介」があり、私の店も紹介いただいた。飲食店としても良い企画で、ポスターを貼っていると「これから美術館へ行く」というお客がいたり、逆に美術館で知って来店したお客もいたりした。入館券半券による割引の仕組みもあったが、混雑時は案内しづらい。レジ横に置ける小さなポップ等があると助かる。また、学校関係のボランティアについて、ボランティア証明書が単位取得につながる制度を持つ高校や大学がある。そうした取り組みを進めれば、学生の来館促進につながると考える。

●**会長**：大学では「ボランティア受入先リスト」があり、学生はそこから自分で選択して活動先を決める。問い合わせも学生自身が行う。織田廣喜美術館が「受け入れ可能である」と明確に表明すれば、大学も学生を送り出せる。大学では年度初めに単位取得制度の説明会があり、その際に「受入先一覧」が学生に示される。その一覧に美術館が記載されれば、学生は選択できるようになる。学生が来館すると、Instagramなどで自然に情報発信してくれる。いわば美術館の広報を担ってくれる効果がある。また、文化観光の視点から、地域飲食店と美術館が連携して取り組むのは非常に良い。来館者が食事をして終わりではなく、店でポスターを見てレシートを持参すれば割引が受けられるなどの仕組みがあれば、「行ってみよう」という動機づけになる。ポスターを貼るだけでは人は動かない。「インセンティブ」をどう示すかが重要だ。委員の提案した「割引シール」は一例で、こうした仕掛けがあると、人は“わざわざ行こう”という心理になる。

●委員：子どもたちがアトリエで活動する様子をSNSで見て、とても楽しそうで良い印象を受けた。私はFacebookしか見ていなかったが、Instagramのほうが利用者が多いため、文化協会としてもInstagramで発信するようにした。企画展により入館者数は変わり、企画運営も難しいとは思いますが、世間的に知られた作家の企画がもう少しあっても良いのではないかと感じている。文化協会として文化祭では美術館に大変お世話になった。活動への理解も少しずつ広がっているように感じるので、今後ともよろしくお願いしたい。

●会長：文化祭の書道部門は非常に多かった。

●委員：そうである。児童の作品、市内の書道教室に通う子どもたちの作品も展示するため、それを見に来る人が多い。絵画はやや減少しており、高齢化の影響もあり出品が少なくなってきた。一方、写真部門はやや盛り上がり、賞を取る方もいる。

●会長：毎回出る意見だが、子どもたちや中高の美術部、地域サークルへの出品依頼は行っているのか。

●委員：若い人への周知はもっと必要だと思う。書道は教室を通じて出品があるが、写真は最近子どもたちがスマホで気軽に撮影するようになっている。それを展覧会参加へつなぐ呼びかけもできる。

●委員：柴田ケイコ展には、私はまず1人で行き、その後子どもたちを連れて再訪したが、とても楽しそうだった。子どもも、70代の母も楽しんでおり、幅広い層が楽しめる展示だった。撮影スポットがあったことも良かった。タイミングよくテレビでドキュメンタリーが放送されたことも幸運だった。SNSでも展覧会以外の細かい取り組みが多く発信されており、「今何をしているのか」「スタッフはどんな思いで動いているのか」が以前より分かるようになり、非常に良かった。ささめやゆき氏・石川えりこ氏による屏風ワークショップが再度開催された点も素晴らしい。以前の展覧会で終わりにせず、作家とのつながりを生かしながら継続して活動していることがとても良い。参加者も24人と多く、良い企画だった。

●会長：展覧会は開催して終わりではなく、そこで生まれたつながりを継続していくことが重要である。数年に一度でも良いので作家の動向を追い、共有していくことは価値がある。大学生に聞くと、「博物館のSNSは見ない」と言う。それは、事実のみの情報発信に偏りすぎているためである。フォローしたくなるSNSには“感情”がある。季節の移ろい、展示準備のワクワク感など、スタッフの気持ちが伝わる投稿があると、人の心は動く。行政のSNSは事実発信にとどまりがちであるが、それを補う視点が必要である。若い世代がボランティアとして関われば、その声を美術館が吸収して成長につながる。

●委員：「自宅に眠っている屏風はありませんか」という呼びかけがあったが、市民から何か反応はあったのか。

●指定管理者:特に反応はなかった。

●委員:我が家にも以前、屏風や掛軸があったが処分した。募集を知っていれば提供したかった。この募集の意図は何か。

●指定管理者:ささめやゆき氏・石川えりこ氏による貼り合わせ屏風ワークショップで使用するためである。古道具店などで購入しているが、家庭にも眠っている可能性があると考え募集した。

●委員:嘉麻市内に眠る文化財を調査し、美術館で引き取ることはできないか。

●会長:すべてを受け入れることは収蔵庫の容量などの理由で難しい。ただし、教育委員会で来年度「昭和100年展」を開催予定されており、その説明をお願いしたい。

●事務局:来年9月に美術館で「昭和100年事業」を開催する予定である。昭和に関する写真や資料の展示を計画しており、市民に資料提供を呼びかける方針である。

■議題2 令和8年度事業計画について

指定管理者による説明(資料4)

質疑応答

●委員:美術を専門とする教員がいる学校は年々減少している状況にある。その中で、中学生美術展を実施するという計画は非常に良い取り組みであると感じた。また、「部活動地域展開」という言葉がある。嘉麻市では、学校単独で部活動を維持することが難しくなっており、サッカーなどは他校と合同で実施している。文化系も同様に、吹奏楽は山田中学校と稲築西義務教育学校の2校のみである。今後は合同活動や拠点校方式が増えると考えられる。現在、美術部があるのは碓井義務教育学校のみだが、部員が1名で、来春卒業すれば廃部となる見込みである。このような状況を踏まえ、織田廣喜美術館を「美術の部活動の拠点」として活用できないかと考えた。美術に興味があっても学校に美術部がないために活動できない生徒が必ずいる。美術館が拠点となれば、そういった生徒が美術館に通いながら活動を続けられる。嘉麻市でこうした取り組みができれば非常に良いと思う。

●会長:オダビ展や文化協会などを見ても、地域には多くのアーティストが存在している。例えば、定期的に交代でアトリエに入って、子どもたちを育てる形で指導を行うということも可能である。イラストレーターや写真家など、多様な分野の専門家がいるので、「今週は絵画の時間」「今週は写真の時間」など、生徒が選択できるようにすることもできる。そうすると、美術館が“子どもが日常的に通える場”となる。この取り組みは非常に優れており、全国的にもモデルになり得る。現在、全国的に少子化が進み、合同チームのように部活動を維持しているが、美術の教員が配置されるわけではなく、現在は非常勤での運営

が中心となっている。そこで「社会資源としてのミュージアム」が学校教育を支える形で関わることは、一つの理想的なモデルとなるだろう。織田廣喜美術館も部活動地域展開に積極的に参加するという姿勢を示すことが重要である。本当に良い提案である。

●委員：不登校について担任と話す中で、学校にはなかなか足が向かない子がいる。しかし、美術館のような空間であれば、担任とも会いやすいのではないかと考えていた。この文化施設を“クッション”のように利用できないかと思う。不登校の子にとって、美術館は学校とは違う安心感があると感じている。そういった取り組みを計画できればと思う。

●会長：その考えは非常に素晴らしい。今、子どもたちが動きにくい要因の一つに「低血圧」がある。自律神経のバランスが崩れ、副交感神経が優位になり体が動かなくなる。私たちは全国で1600件以上のデータをもとに調査してきたが、中高大学生の低血圧や自律神経の改善に、ミュージアム空間が大きく影響することが分かっている。美術館に10～20分滞在するだけでも改善が見られる。

●委員：嘉麻市には不登校支援施設「レストピア」があるが、そこへ行けない子もいる。学校での話し合いの中で、学校では話しづらいという子どももいる。美術館を“つなぎ”の場として使えば、レストピアへも行きやすくなるのではないか。まずは保護者と一緒に美術館に来るという形がつかれると良い。

●会長：ニューヨークには「ミュージアムスクール」がある。委員の言うように、学校へ行く前段階をいくつか用意し、最終的に「学びたい」気持ちにつなげていく。北九州市では「いのちのたび博物館」と子どもをオンラインでつなぎ、学芸員とチャットでやり取りする取り組みがある。顔を出さなくても良く、話さなくても良い。こうした“発見”がきっかけとなる。美術館では作品に触発されて「この色が良い」など自発的な言葉が生まれる。学芸員がそれを受け止めることで、段階的な受け皿ができる。こうした「段階のある場」としてのミュージアムの役割は、今後の織田廣喜美術館にも関わる。

●委員：広報活動強化の中で「プロセスエコノミー」を紹介したい。作品やイベントの“過程”を発信する広報手法で、オープン前からファンをつくる効果がある。企画展の準備段階やこの協議会の様子などをSNSで発信すると、興味をもってもらえるのではないか。

●会長：これまでの広報は結果の発信が中心であったが、準備段階の努力や感情を伝えることで、ボランティアも増えるし関心も高まるだろう。

●委員：学校に行けない子だけでなく、登校している子にも、集まれる場があるのは大きい。小規模校では人間関係が固定され、馴染みにくい場合がある。こうした子どもも美術館を活用できると良い。

●委員：松本紀生写真展の具体的な内容は決定しているのか。

●指定管理者：内容は決定している。若干会期が延びる可能性がある。作品展示とライブ

シアターを予定している。

●委員：筑豊地区 PTA 連合会の研修で松本氏の講演を聞いたが非常に感動した。市内の学校向けに出前講座をしてほしい。映像は子どもにとっても大きな感動となる。

●委員：私も楽しみにしている。「ライブシアター」とはどのようなものか。

●指定管理者：松本氏が撮影した約70分の動画を大型スクリーンで上映するものである。「夢サイトかほ」のホールで実施予定である。

●委員：嘉麻市の小中学生が、出前授業に限らず見学に来る機会を増やせばいい。

●会長：来年度の目標の一つに「バスセット」がある。スクールバスを使っていない時間帯に他校も利用できるよう、美術館から周知することも検討するとよい。

●委員：中学生美術作品展の実施はとても良い。部活動地域展開の提案も可能性がある。子どもたちが美術館を身近に感じることで、美術館が持続するうえで重要である。

●委員：松本紀生写真展は運動会の時期と重ならないか。

●指定管理者：嘉麻市の小学校は運動会が10月、中学校は5月である。

●委員：会期はどの程度か。絵本原型展のように1か月ほど確保するのか、ゴールデンウィークまで延ばすのか。良い展示なので子どもにもぜひ見せたい。出前授業は理科的要素もあるため、オンラインで全校へ配信する方法もあるのではないかな。

●会長：可能な限り早期に学校へ情報提供した方がよい。

●委員：オンラインを活用すれば、学校へ行っている子どもにも学びの機会が広がる。コロナ禍を経てオンラインが一般化したため、一気に進められる。「チーム学校」という考え方があり、地域と学校が連携して子どもを支えるというものだ。織田廣喜美術館では学芸員と大学生が資料整理している様子もSNSで見た。碓井郷土館や図書館など、“見るだけで良い空間”が複数あるため、包括的に活用できる。美術館への来館を“出席扱い”にできる制度があれば大きな助けになる。

●会長：モデル事例になり得る。一度に全ては難しいが、今日出たアイデアのうち一つでも二つでも、来年度の事業に盛り込んでほしい。

議題3:今後の織田廣喜美術館の運営について

事務局による説明(資料5)

質疑応答

●なし。

閉会

この会議録は、緒方会長に確認していただきました。